

## 名作再読、拾い読み (23)

### 『橋からのながめ』 ("A view from the bridge")

小澤 文彦

アーサー・ミラー (1915-2005) はアメリカの劇作家でニューヨーク出身です。ユダヤ人の家系に生まれ、比較的豊かな幼年時代を過ごしますが1930年代の大恐慌によって父親の会社が倒産したため、一転して貧乏生活を強いられ、家計を助けるため登校前にパン屋で働きました。高校卒業後は様々な仕事を転々とししますが、その間に読んだドストエフスキーの『カラマゾフの兄弟』に感動し、劇作家になろうと決心します。浪人生活2年の後、ミシガン大学に入学。卒業までに数本の戯曲を発表しました。『みんな我が子』(1947) がヒットしてニューヨーク劇評家協会賞を受賞。その後、『セールスマンの死』(1949) でトニー賞、ピューリッツァー賞を受賞して劇作家としての地位を確立し、テネシー・ウィリアムズと共にアメリカ現代演劇の担い手となりました。代表作には他に、『るつば』(1953)、『橋からのながめ』(1955)、『ヴィシーの出来事』(1964)、『代価』(1968)、『アメリカの時計』(1980)、『壊れたガラス』(1994)、『大司教の天井』(1997) などがあります。

演劇の他、映画の脚本や小説、評論も発表しています。1965年から1969年まで国際ペンクラブの会長を務めました。私生活では1956年にマリリン・モンローと結婚して話題を集めました。1961年には離婚しています。2005年に心不全で亡くなりました。89歳でした。

今回は『橋からのながめ』を紹介します。ニューヨークのイタリア人移民の家族とそこを頼ってやって来たシチリアの若者達との間に起こる複雑な心理状態が描かれた作品です。

ニューヨークの港湾労働者エディーは妻のビアトリスと一緒に姪のキャセリンを養女として育てています。17歳になったキャセリンは就職が決まり、高校卒業前から働きに行くことになりました。エディーは彼女の勤務先の環境が悪いので周辺の男性に注意して態度や振舞いに気を付けるように言います。一方、ビアトリスはキャセリンに対するエディーの愛情が、娘に対するというより大人の女性に対する愛情に変化しつつあるのに気付いて心配していました。

ビアトリスの従兄弟であるマルコとロドルフォが不法入国してエディーの家に同居することになりました。マルコは妻子を国に残しての出稼ぎですが、ロドルフォは独身で、金髪の美男

子。歌も料理も裁縫も上手で、キャセリンは直ぐにロドルフォに夢中になります。その姿を見て、エディーは心底穏やかではありません。

ある日、エディーが酒に酔って帰宅した時、キャセリンとロドルフォが寝室から出てきたので、エディーはロドルフォに掴みかかり喧嘩になりました。エディーがロドルフォに家から出て行けと言うと、キャセリンも一緒に出て行くと言います。エディーは弁護士に相談しますが、キャセリンの心を法律で抑えることはできません。

エディーはそれが法に則った正義だと自分に言い聞かせ、移民局へ不法入国者がいると密告します。マルコは逮捕された瞬間にエディーの仕業だと見抜き、彼に唾を吐きかけて侮辱します。逮捕された二人は判決が出るまで保釈の身となりました。ロドルフォはキャセリンと結婚すればアメリカの市民権を得る事ができますが、マルコは家族を助ける当てもなく帰国しなければなりません。マルコはシチリアの掟に従って、密告者に対する正義を行う決心をします。マルコと対決するエディーは、腕力では勝ち目が無いのでナイフを手に入れます。しかし、逆手にとられ、ナイフが自分の体に突き刺さります。彼はビアトリスの腕の中で息絶えました。

エディーの行為は、法的には正しくても、動機が不純で、人道的には許し難いことです。アーサー・ミラーは1950年代のマッカーシズムの時代に、非米活動委員会によるレッド・パーージ審問を受け、証言を拒否しました。その経験が彼の作品には大きな影響を与えています。

彼はベトナム戦争に反対し、東欧・ソ連の作家達の人権擁護運動を行うなど、生涯に亘って弱者に対する連帯を訴え続けました。絆の重要性が再認識されている現代日本において、彼の作品には共鳴部分が多いように思われます。

#### 参考文献

1. Arthur Miller "A view from the bridge" (Penguin books, 1961)
2. アーサー・ミラー著 菅原卓訳『橋からのながめ』(『アーサー・ミラー全集(2)』より) (早川書房、1976)

おざわ ふみひこ (情報サービス課)